

酒田英夫著

山鳥 重, 彦坂興秀, 河村 満, 田邊敬貴●シリーズ編集

〈神経心理学コレクション〉

『頭頂葉』

書評者

入来篤史 (理研脳センター／東京医科歯科大学／ロンドン大学)

酒田英夫先生の研究の足跡は、世界の頭頂葉の研究の歴史そのものである。そして、その集大成を象徴するのが、本書最終章に掲げられた、セザンヌの『サン・ヴィクトワール山』に見る線遠近法の妙技であり、フェルメールの『真珠の耳飾りの少女』に込められた陰影の魔術なのである。つまり、「頭頂葉を通して見た世界の風景」はかくあり、ということなのだと思う。どのようにしてこの境地に辿りつかったのか、その歩みの一步一步に込められた想いを、希望を、信念を、本書の聞き手の山鳥重、河村満、田邊敬貴の3先生が巧みな質問で聞き出してゆき、酒田先生ははるか遠くに視線を投げながら、そのときどきの世界の研究現場の人間模様を回想しつつ物語ってゆく。

ここには酒田英夫先生の、自然に対する畏敬の念が満ちている。真の研究者かくあるべし、という真摯な態度である。そんな中で、私の心に残ることばがある。本書にも出てくる『ニューロンに聞く』という、脳に対する謙虚

な研究姿勢である。まずは仮説を立てて、神経活動を検証するための手段として用い、精密に定式化されたモデルを構築してゆく、という現在一般的になった神経生理学の手法とは、明確に一線を画するこの態度は、いまや「酒田学派」のスローガンといってもよいだろう。

そのような酒田先生の薫陶を受けて頭頂葉研究に足を踏み入れた私であるが、冒頭の絵画に表現されるような風景を作り出す、頭頂葉のメカニズムはどのようになっているのかを、日々考えている。私はいま、自室の壁に掛かる、カンディンスキーの『Yellow-Red-Blue』を眺めている。私の「頭頂葉」機能のメカニズムはこんなイメージである。この画家ご本人が何を意図したかはさておき、私は自分の頭の中も、こんな風になっているのではないかとふと感じたりもする。私自身も頭頂葉を研究のフィールドとするようになって以来、だんだんと醸成されてきたイメージなのである。本書を読み進めていただくと、この意味をご理解い

ただけるのではないか。そのさわりはというと、以下になるのではないかなと思う。

霊長類になって特に発達した頭頂葉では、顔の前で巧みな操作をすることができるようになった手指によって形作られる空間構造を、両眼視による精密な三次元視覚情報解析によって、多種感覚を統合してその情報の持つ「意味」を抽出する装置が進化した。この機能は、しかし、空間の形や構造の解析にとどまるものではなからう。われわれはより高度な概念や思想を、空間操作のアナロジーでもって考えるではないか。カンディンスキーのこの絵は、そんなありさまを描いているように見えるのだ。頭頂葉は思索の立体交差である。これが、いわば私が酒田先生から教わり、いま抱いている「世界から見た頭頂葉の風景」なのである。

A5 頁 280 2006 年 医学書院刊
定価 3,990 円 (本体 3,800 円 + 税 5%)
[ISBN978-4-260-00078-9]

